

アメリカ自然主義文学と「アメリカの夢」

—シオドア・ドライサーの場合—

平野 信行

一 はじめに

アメリカ自然主義文学が、エミール・ゾラ等によって理論化されたフランス自然主義を基盤とし、ステイヴン・クレインやフランク・ノリス等によってそれがアメリカに移入され、そこでさまざまなアメリカ的な色合いが付けられて、今日われわれの知る形に体系化されたことは、これまでたびたび指摘されているが、ここで問題となるのは「アメリカの色合い」とは何ぞやということである。この小論の目的は、アメリカ人ないしアメリカを論ずる場合にしばしば言及される「アメリカの夢」という概念を手懸りとして、アメリカ自然主義作家の一人

に数えられるシオドア・ドライサーの『シスター・キャリー』を分析しながら、この問題を考察することであるが、その準備段階として、「アメリカ」という概念を取り扱った「自然主義」の特質について概略触れておきたい。

二 アメリカ自然主義文学の背景

エミール・ゾラは、『実験小説論』で、人生は実験であり、作者はいわば実験室の中にいる科学者として、作中人物を客観的に観察するのだという考えを打ち出し、同時に、人間の置かれている環境に加えて、遺伝の力が彼の知・情両面の成長発達に大きく影響するのであると

する論を展開して、『居酒屋』、『ナナ』、『ジェルミナル』等の作品を含むいわゆる「ルーゴン・マッカー・セット」において、みずからその理論を実践に移したのであったが、そこに顕著に現われているのは、人間の能力に無限の可能性をみるのではなく、人間は限られた存在であって、彼の意志や行動は種々の要因によって決定されるという決定論である。言い換えれば、この立場は、自然主義思想の生まれる前の十八世紀の主潮であった人間の理性への信仰を否定するものである。理性を否定された人間は主体性を失った「現象」にすぎなくなり、生命を持った存在から一個の物体に墮ちてしまう。そうすると、理性にかわって感性が頭をもたげてくるであろう。すなわち、いままでも理性の力で抑えられていた人間の持つて生まれた本性、性欲、物欲といった欲望が表面化してくるのである。ゾラ、モーパッサン、バルザック、フロベール等の作品に見出されるときついまでになまましい欲望の葛藤描写はそのあらわれにほかならない。自然主義の「自然」とはまさにそうした「本性」、「本能」の意であって、その意味では、「自然主義」は「本性(能)主義」と称されてしかるべき特質を有している

のである。

このような暗い、悲観的な思想が受容されるためには、それを可能にする条件がなければならないが、アメリカの場合にはいかなる条件があつたのであろうか。その一つとして「アメリカの夢」の質的变化を考えてよいと思う。それでは「アメリカの夢」とは何かと開き直って考えると、これを明確に定義づけることはきわめて難しい。にもかかわらず、この言葉は、時代を変え、所を変えながらもかかわらず、この言葉は、時代を変え、所を変えながら、さまざまなニュアンスを付与されて言及されている事実がある以上、その作業を疎かにしておくことはできない。その手懸りの一つに、「アメリカの夢」と言う場合に、「進歩」、「成功」、「幸福」といった概念と関連づけて論じられることがある。これらの概念から連想されるのは、「フロンティア」⁽²⁾、「明白な宿命」⁽³⁾、「成功の夢」等の言葉であるが、それらは、とりもなおさず、十七世紀にアメリカ植民が行われて以来、アメリカ人の精神的支柱となり、種々の困難に際して彼らの拠り所となつている中心的な価値観であるから、「アメリカの夢」はアメリカ国民の存在そのものと深く関わる重要性を有しているといえる。

右に挙げた「フロンティア」、「明白な宿命」、「成功の夢」のうち、もっとも重要なのは「フロンティア」であって、あとの二つはこれから派生する事柄である。フロンティアこそはアメリカ国民の精神的・物質的基盤たるべきものであり、フロンティアある限りアメリカは健全である、という抜き難い信仰にも似た意識がアメリカ全体を支配していた、否現在でも支配的である、と言っても過言ではない。周知のように、アメリカへの植民は、まず一六〇七年にヴァージニアに、ついで一六二〇年にメイフラワー号に乗った清教徒たちの手でニューイングランドのプリマスに行われたのであるが、これらの植民の背景には特異なアメリカ観がある。つまり、旧世界の人間、とくに政治的、経済的あるいは宗教的重圧に苦しむ人間にとって、アメリカは限りない未来を秘める憧れの土地、約束の土地、「蜜流るる土地」であった。言い換えれば、アメリカそのものがヨーロッパ人にとっては「フロンティア」であったのである。「アメリカの夢」の出発点がここにあることに注意すべきである。したがって、アメリカを目差す者の眼目は、その目的が宗教的関心に拠るものであれ、経済的なものであれ、いかにし

てそれぞれの「夢」を実現するかに置かれることになる。とりわけ注目すべきは、宗教的な原因が主であるニューイングランド植民である。なぜならば、このとき持ち込まれた清教主義(ピューリタニズム⁽⁴⁾)のちに「アメリカの夢」を構成する重要な要素に発展するからである。よくいわれるように、清教主義の中心はカルヴィンの思想であり、植民者は厳しい禁欲的生活を強いられた。人間は生まれながらにして原罪を背負っている、神の救いを受けられるか否かは生を享けたときにすでに決っている、その人間がすこしでも神に近づくためには、物欲・肉欲などの本能を抑え、ひたすら勤勉を旨としなければならない。しかも、不慣れた自然環境、先住民族インディアンの脅威などがあり、彼らにとって、新大陸での生活は「アメリカの夢」とはほど遠いものであったに違いなく、当時の指導者の一人ウィリアム・ブラッドフォードの『プリマス植民地について』には、旧大陸で描いていた夢とかけはなれた現実

に失望した植民者が数多くいたことが綴られている。こ

うした厳しい現実にもかかわらず彼らに「アメリカの夢」を捨てさせなかつたのは、強い信仰心もさることながら、限りない可能性を秘めたアメリカの原野の存在で

あった。言い換えれば、「フロンティア」への信頼である。こうして、それ自体が「フロンティア」として「夢」の実現の場であったアメリカのなかに、さらに「フロンティア」が出来ることになる。つまり、われわれは「アメリカの夢」と密接な関連を持つ概念として「フロンティア」を考えるのであるが、じつは、それは以上のような二重の構造を有しているのを知るのである。そして、植民初期においては、この二つの「フロンティア」は、ほぼ等価値に見られていた。たとえば、ニューイングランドを拓いた植民者たちが、アメリカに渡って「丘の上の都市」を建設することを目差したのがその典型的な例である。ところが、しだいに植民が進んで、開拓村ができ、さらにそれらが発展して町となりというように、フロンティアが前進を始めると、二つの「フロンティア」の価値に微妙なズレが生じてくる。「丘の上の都市」を築くのはいわば集団の意志であったのに対して、フロンティアの前進にもなつて生じるのは個人の意志である。しかも、個人の意志の貫徹が可能であるという当時の実態があった。自然の脅威はねのけながら自らの力で荒野を切り拓いていけることがわかると、もはや集団の意

志の一部としての個人の意志という顧慮は必要性が薄くなり、集団それ自体にも他の集団から独立であるという意識が次第に強くなる。努力すれば必ず道は開けるといふ、自己の力に対する信頼感、ひいては人間の力のすばらしさを誇るといふ傾向が強まり、これがいわゆる「自助の精神」を産み出すのである。それはまた、たとえ現在が貧窮の状態にあつても、努力すれば必ず運が向いてくるといふ「ぼろから富へ」(from rags to riches)とか「成功の夢」へもつながる。もちろん、努力すればといっても、精神のみでは実現不可能であつて、何らかの物質的支えがなければならぬ。アメリカの場合、それは機械文化の急速な発達⁽⁵⁾であり、なかでも、銃火器の改良、開発、金鉱の発見、大陸横断鉄道の完成を忘れてはならない。

このような物質的支えと共に「アメリカの夢」実現の要素として記憶されるべきものは、「明白な宿命」と「お上品な伝統」という二つの精神的価値基準である。前者は「フロンティア」を前進させることの理論的正当化の手段に用いられた概念であり、一八四五年に『民主評論』^{リフター}なる雑誌に現われた。これは、フロンティアを前

進させ続けるのは、すぐれた才能の持ち主であるアメリカの国民に神から与えられた「明白な宿命」であるといふことで、はじめはアメリカ国内における場合に用いられたが、やがて国外への領土拡張にも適用されるようになり、軍事作戦面からのマハンの理論と相俟って、アメリカの侵略戦争を支持する論拠として使われるにいたる波及効果の大きいものである。この論拠がもち出されたもっとも最近の例がベトナム戦争であることは記憶に新しいところである。

つぎの「お上品な伝統」はこれほど明確ではないが、「成功の夢」実現のための道徳的規範として絶大な力を持っていた。この伝統は、十九世紀のヴィクトリア朝的モラルに、植民当初から培われてきた清教主義の倫理が結びついて出来たものと考えられているようだが、「お上品な」という形容詞がついているところから想像されるように、社会的に美德とされるモラルの修得に努め、社会に受け入れられるように励むところから「成功の夢」を実現すべきことを説くのである。

以上に挙げたような諸々の要素を含みながら、「アメリカの夢」や「成功の夢」実現の期待はアメリカ社会の

発展と共に増大してゆく。その発展はフロンティアを前進させながら荒野を文明に変えてゆくことに等しい。しかし、一方、荒野が文明に変えられるということは、それだけフロンティアが減少してゆくことを意味する点に注意しなければならぬ。つまり、物質的支えの強化で夢の実現の期待が大きくなる反面、その実現の機会が次第に狭められるという矛盾が生じるのである。こうした矛盾の狭間に立たされながら、アメリカ国民の意識のなかには、「成功の夢」実現への期待とその可能性の減少に対する失望感の二つが混在し、フロンティアが前進するにつれて、両者の懸隔が大きくなってゆく。その差が最大になるときが一八九〇年のフロンティア消滅の発表であった。この年の国勢調査によって、アメリカのフロンティアはなくなったとされたのである。この三年後、フレデリック・J・ターナーは、「アメリカ史におけるフロンティアの意義」と題する論文でこのことを論証した。⁽⁶⁾ いままで述べてきたように、「アメリカの夢」実現の期待はフロンティアがあってはじめて維持されるのであることを思えば、アメリカ国民にとって、この一八九〇年の発表が衝撃的な「事件」であったことは容易に想

像がつく。フロンティアがなくなったのだから、「アメリカの夢」は実現したのではないかとする考え方は成り立たない。なぜならば、何かを実現したときにはその次の目標が現われるのに、フロンティアがなくなったことは、もはや次の目標を設定できないことを意味するからである。

「アメリカの夢」といい、「成功の夢」といい、人間の可能性を信ずる樂觀的な考え方であるから、この樂觀論が成り立たなくなれば、いままでそれを支えてきた諸諸の価値観に対する疑問が生じてくるであろう。

「成功」とか「お上品な伝統」とか「進歩」といったものは現実性が薄くなり、単なる神話にすぎなくなる。こうした状況下にヨーロッパから自然主義が移入されてきたのであるから、それがかなりの共感をもって受け容れられたことは当然である。ただし、受け容れられたといっても、社会的に美徳とされるモラルは厳然として存在していたから、それらに抵触する価値観は激しい抵抗を受けねばならない。人間の理性よりも感性を重視する自然主義作家は、まずそうしたモラルと闘わねばならなかった。⁽⁷⁾ その典型的な場合がシオドア・ドライサーであり、

彼は敢然として社会のモラルに挑戦したのである。

三 シオドア・ドライサーと「アメリカの夢」

人間の意志や行動を規定する要素として環境の力を重視する自然主義者の立場からすると、シオドア・ドライサーの生まれ育った環境は、そのことを裏付けるのに十分であったといえる。彼は一八七一年にインディアナ州のテラ・ホートに十二番目の子供として生まれたが、ドイツ系移民で、小規模ながら織物工場を経営していた父親が、シオドアの生まれる前年に、運悪く工場全焼という災難にあい、そのうえ、工場再建の作業中に、落ちてきた角材が当って負傷したために、ドライサー家はたちまち貧困のなかに投げ出された。父親は、工場再建のために借り入れた金の返済に追われることになり、しかも家庭には十二人の子供を抱えているのであるから、生きているのが精一杯の状態である。こうしたなかに生まれたシオドアは、いわば生まれながらにして「アメリカの夢」あるいは「成功の夢」実現への道を歩まされることになったわけである。

父親は度重なる災難と借金の重圧で精神的に疲れ、そ

の反動として、子供たちには厳格なカトリック教徒として厳しい態度で臨んだ。これに対して彼らは反撥し、しばしば非行に走ったという。兄ポールの家出、姉エマの駆け落ち等はそうした反撥の産物と考えられる。しかし、このように暗い家庭にやがて一条の光がさしてきた。家出したポールが流行歌詞作家として成功したのである。「成功の夢」実現を目差さねばならないシオドアに格好の目標ができた。彼が、いつの日か兄のようになりたいという野望に燃えたであろうことは想像に難くないが、「兄のように」というなかには、ただ成功につながる金の力のみならず、異性に対する憧憬があることに注意せねばならない。伝記によれば、当時ポールは売春宿のおかみと同棲していたが、シオドアはこれに強く惹かれたということである。彼の頭のなかで、金の力と性の力が成功と一直線に結びついたと言ってよいだろう。換言すれば、成功は性欲と物欲に深く関わるということだ。ここで、自然主義は本能主義と言ってもよいほどに、人間の持つて生まれた本能を重視することを想起するならば、兄の成功や姉の駆け落ちといった「事件」によって、自然主義作家シオドア・ドライサー誕生の御膳立ては整っ

たのである。しかし、このような条件が与えられていても、何かのきっかけで自然主義に触れなければ、自然主義作家シオドアは生まれえない。伝記によると、彼が成功を夢見てシカゴに出て、新聞記者になったとき、H・B・ウォンデルという編集者が、彼にゾラやバルザックを読むことをすすめた。こうして彼はフランス自然主義に接触するのであるが、この体験は彼にとってきわめて重要な意味を持っていたといつてよい。そもそもシオドアが新聞記者を志した動機は、事実を報道して世間に現実をわからせるといふような立派なものではなく、記者になれば、名士、著名人に直接会える偉い人間になれるというまことに単純なものであったが、ゾラやバルザックの世界は、社会の底辺に蠢く人々、大衆、庶民のそれであり、いままで上ばかりを向いていたシオドアは、いやでも下のほうに眼を向けざるを得なくなったわけである。貧乏のなかから成功者ポールを出した彼自身の家庭に典型的にみられるような、持つ者の幸福、持たざる者の不幸というボタンを彼はすでに知っていたが、ゾラやバルザックに接したことによって、いよいよその事実を痛切に感じたに違いない。一九〇〇年に発表された『シ

スター・キャリア』はそうしたなかから生まれたのである。この小説にモデルがあることは衆知の事実である。すなわち、すでに触れた姉エマの駆け落ち事件である。⁽⁸⁾ 彼女はあるバリーの妻子ある中年の支配人と恋仲になり、彼がバリーの金庫から大金を持ち出したことから逃亡生活を余儀なくされたのであるが、いうまでもなく、彼女とバリーの支配人は『シスター・キャリア』のキャリアとハーストウッドである。『シスター・キャリア』は「成功の夢」を描いているといわれる。たしかにその通りである。しかし、成功というのであれば、シオドアには流行情詞作家ポールという絶好のモデルがあるではないか。「成功の夢」を描くのであれば、彼にならった主人公を設定するのが常識的ではないかという疑問がでてこないだろうか。見方によっては、駆け落ちした姉はある意味では成功者と言えるかもしれないが、彼女と女優として成功するキャリアの間には大きな隔りがある。作者は『シスター・キャリア』に姉の駆け落ちという実際にあつた事件を用いているが、彼の頭には成功者ポールの姿が浮んでいたに相違ない。そのとき、主人公をポールのような成功者にすれば従来の成功物語のボタンを踏襲す

ることになったのだが、そうせずに女性を成功者に設定したところにこの作品の特異性があるし、そこには作者独自の成功観が反映されているように思う。

一八九〇年にフロンティア消滅が発表されて、いままでもアメリカ国民の精神的基盤であった発展への限りない可能性が見えなくなり、いままで「お上品な伝統」や「明白な宿命」といった美名の下に隠されていた矛盾が、アメリカ内外に露呈されるに到る。社会的には、一八九〇年代から一九一〇年代にかけては、「進歩の時代」といわれるように、独占資本の蓄積によって繁栄の道を歩んでいたアメリカではあるが、フロンティア前進の可能性がなくなったという衝撃があり、持てる者の富が増大する一方で、持たざる者の貧窮の度が増すという現象がいよいよ明確な形をとって現われてきている。こうした折に成功に対する価値観を従来通りに維持することはもはや不可能である。一つ事に成功しても、その先別の成功を目差すことが叶わないのであれば、成功とは空しいものというみかたが出てくるのはごく自然ではないか。シオドア・ドライサーが男性を成功の道を歩む主人公とせず、女性(キャリア)をその位置に据え、逆に男性

(ハーストウッド)を成功から失敗への転落者としたのは、そうした成功観の現われである。

「アメリカの夢」や「成功の夢」という場合、夢を実現する主体は男性であり、女性はいわばその補助者であるというのが一般的な見方であった。『シスター・キャリー』が出版された一九〇〇年においてもそれは変わっていないということは、ロバート・グラントの『パン種のないパン』という小説がベストセラーになっており、この作品の主人公セルマ・ホワイトは、男性を助け、共同して幸福な生活を目差す、女性の鑑ともいべき姿に描かれているという事実にはつきり現われている。『シスター・キャリー』との関連におけるこの小説の問題性については、大井浩二氏が『アメリカ自然主義文学論』のなかで詳しく述べておられるが、要するに、セルマ・ホワイトは、行動と進歩と迅速で分別ある結論を好むアメリカ女性であり、それがアメリカ的なやり方であり、成功する人間が進んでゆくやり方であると信じている女性なのである。そして、行動や進歩や成功が、セルマ自身のためではなく、彼女の夫たる男性のそれであって、彼が成功者となれば、それが彼女の幸福につながるのだ

という考え方が作品中に色濃く出ていることにわれわれは注意せねばならない。これを要するに、フロンティア消滅の発表以来、従来の成功観を暗いかげが覆いはじめたとはいえ、「成功の夢」を支える「お上品な伝統」はなお健在であった。

四 『シスター・キャリー』と「アメリカの夢」

『シスター・キャリー』を「アメリカの夢」との関連で眺めるとき、われわれは、この作品のなかに作者の設定したさまざまな舞台装置があることに気づく。冒頭部でわれわれが眼にするのは、十八歳のキャロライン(キャリー)・ミーバーが汽車でシカゴへ向うところであるが、この部分に彼女の持物の描写がある。小さなトランク、安物の模造ワニ皮手さげカバン、紙箱入りのわずかな弁当、黄色いなめし皮の蝦蟇口、中味は頼り先の姉の住所を書きつけた紙切れと小銭で四ドル、これらがキャリーの持物のすべてである。この描写のなかに「小さい」、「わずかな」、「安っぽい」といった形容詞が用いられていることに注意したい。また、しばしば病的なイメージをあらわすものとして象徴的に用いられる「黄色」が出

てくることにも注目したい。キャリアは後に成功への道
を歩むことになるが、「成功の夢」は、ときに from rags
to riches と表現されるまことに、出発点において貧しい
状態が強調されることにより、「成功」の意味がそれだ
け明確になるのであるから、冒頭における彼女の持物の
設定はきわめて効果的である。それでは、彼女が目差す
シカゴとはいかなる町であらうか。それに ついで、作
者は作品の第二章で周到な説明を行なっている。少々長
くなるが、重要な部分と考えられるので引用してみよ
う。

In 1889 Chicago had the peculiar qualifications of
growth which made such adventuresome pilgrimages
even on the part of young girls plausible. Its many
and growing commercial opportunities gave it wide-
spread fame, which made of it a giant magnet,
drawing to itself, from all quarters, the hopeful and
the hopeless—those who had their fortune yet to
make and those whose fortunes and affairs had
reached a disastrous climax elsewhere. It was a

city of over 500,000, with the ambition, the daring,
the activity of a metropolis of a million.... The sound
of the hammer engaged upon the erection of new
structure was everywhere heard. Great industries
were moving in. The huge railroad corporations
which had long before recognised the prospects of
the place had seized upon vast tracts of land for
transfer and shipping purposes.... The entire metro-
politan centre possessed a high and mighty air cal-
culated to overawe and abash the common applicant,
and to make the gulf between poverty and success
seem both wide and deep. (中)

この描写のなかに、この注目をすべき表現がある。
たゞ、even on the part of young girls と書けり
と、adventuresome pilgrimages の主体が男性
と考へらるべしなりとを暗示して、シカゴを a
giant magnet, drawing to itself, from all quarters,
the hopeful and the hopeless と描き出さ、この都会に
集ってくる人々が、自らの意志でくるのではなく、シカ

ゴという大きな磁石の磁力に吸い寄せられてくるのだと書く。主体性がなく吸い寄せられた者たちの運命は磁石そのものが握っているのであるから、これは、実験室で試料を観察する科学者の立場、すなわち、自然主義作家としての作者の態度を示したことになる。そして、その磁力を構成するものには、高層ビル建設の槌音、広大な土地にのびる鉄道会社、諸諸の大企業などが主要なものであることが暗示されるのである。キャリアはこのような環境に投げ入れられるのだが、その彼女はシカゴを見て次のように感じる。

The great streets were wall-lined mysteries to her; the vast offices, strange mazes which concerned far-off individuals of importance. She could only think of people connected with them as counting money, dressing magnificently, and riding in carriages...It was all wonderful, all vast, all far removed, as she sank in spirit inwardly and fluttered fully at the heart as she thought of entering any one of these mighty concerns and asking for something to do——

something that she could do——anything. (22)

ここにはシカゴという大磁石の磁場にとらえられたキャリアの姿が見事に描き出されている。あとは、どの磁力によってどこへ引かれてゆくかという点に読者の興味が集る。残念ながら、彼女は富の方向へは引かれなかった。シカゴに着いた彼女が見たのは、姉ミニ一家のつましさであり、経験したのは、仕事の経験がない彼女が、さんざん断られた挙句にようやくみつけた靴卸売店の仕事のやりきれなさであったから、よりよい生活、幸福への彼女の憧れはますます強くならざるをえない。このような状態の彼女の前に現われるのがドルーエというセールスマンである。しかし、彼女が彼に会うのはこれが初めてではないことは、読者であるわれわれは承知している。すでに、シカゴに向う車中で彼は登場しているのである。その服装といい、態度といい、若い女性キャリアの心を惹きつけるに十分であった。作者は次のように描写している。

His suit was of a striped and crossed pattern of

brown wool, new at that time, but since become familiar as a business suit. The low crotch of the vest revealed a stiff shirt bosom of white and pink stripes. From his coat sleeves protruded a pair of linen cuffs of the same pattern, fastened with large, gold plate buttons, set with the common yellow agates known as "cat's eyes"...and from his vest dangled a neat gold watch chain, from which was suspended the secret insignia of the Order of Elks. ⁽²⁾

これを冒頭のキャリーの持物の描写と比較してみると、きわめて対照的であることがわかる。もちろん、作者が意識的に用いた技巧である。両者を比較してみると一つ共通する部分がある。それは、共に「黄色」が用いられていることだ。しかしながら、キャリーの場合は「小さな」トランク、「安っぽい」手さげカバンなどと並んだ「黄色い」蝦蟇口であるのに対し、ドルーエについては、最新流行の背広、紅白のチェック縞のワイシャツ、金ボタン、金鎖などと並んでいる「黄色」なのである。しかも、ドルーエの場合は「猫目石」という宝石の「黄色」

なのだ。蝦蟇口の「黄色」とは大いに異なる。こうした対比を導入する作者の意図は明らかであろう。全身富のかたまりのようなドルーエと、貧困の擬人化のようなキャリーは、"from rags to riches"の"riches,"と"rags"を象徴している。すなわち、"rags"の状態にあるキャリーにとって、"riches"の状態にあるドルーエは憧憬のまとなるのである。この対比は、「アメリカの夢」とこの作品を関連づけて考察する場合に見逃すことができない。

この富の権化のようなドルーエが再びキャリーの前に現われたとき、彼は essence of sunshine and good-humor であつたと描写されている。⁽⁴⁾ 暗く沈みこんだキャリーに突然陽光が射してきたのである。再会した二人は食事をし、別れ際にドルーエは十ドル紙幣を二枚キャリーに渡した。思いがけなく二十ドルもの金を手にした彼女は、ジャケット、靴、ストッキング、スカート……と次第に欲しいものの夢をふくらませる。この場面を中心として、ドルーエがキャリーと再会する第七章における彼の描写は、富が衣服を着ているかのような冒頭部のそれとは異なり、専ら彼が善良で、同情心厚い人間であることを強調

している。人間的によくできていて、しかもかなりの富を持つている男性は、成功者の典型である。第十章に次のような文章がある。

Society possesses a conventional standard whereby it judges all things. All men should be good, all women virtuous.⁽²⁵⁾

ここに描かれている基準からすると、ドルーエは、"good"といえるだろう。それに対してキャリーが、"virtuous"であるか否かが問題になる。それは、"virtue"が何を基準にしているかという点に関係するわけで、そこから例の「お上品な伝統」とのつながりもでてこよう。その意味では、all women virtuous はなかなか意味深長である。

ドルーエとの再会がきっかけで、キャリーは姉シニール一家の生活とはおよそかけはなれた華かな暮らしを経験する。そうしたなかで、彼女はドルーエを通してハーストウッドに会うのであるが、われわれには彼は第五章ですでお馴染みである。彼は「フィッツジェラルド・アン

ド・モイ」という一流レストランの支配人をしており、その地位まで上ったことについて、作者は

He had risen by perseverance and industry, through long years of service, from the position of barkeeper in a commonplace saloon to his present altitude.⁽²⁶⁾

という表現を用いて、彼が"from rags to riches"の「成功の夢」を実現した人物であることを示している。続いて彼の服装の描写が続くのであるが、それは、ドルーエのそれに見られるけばけばしい豪華さではなく、洗練された美しさである。彼が成功者として理想的な人物であることは、次の文章によってより一層鮮明に浮び上るのであろう。

He knew by name, and could greet personally with a "Well, old fellow," hundreds of actors, merchants, politicians, and the general run of successful characters about town, and it was part of his success to do.⁽²⁷⁾

このように誰からも「成功者」とみなされるハーストウッドではあるが、家庭的にはもうひとつ満されないものがあつた。第九章にハーストウッド家の描写があり、食卓での会話が続くのであるが、そこにみられるのは、恵まれた家庭であるにもかかわらず、よりよい生活を望む妻や子供たちの勝手な姿であり、ハーストウッドはなんともいえないやりきれなさを感じる⁽¹⁹⁾。同じ章に「Hurstwood's residence) lacked that toleration and regard without which the home is nothing. ⁽²⁰⁾と、う表現が用いられているが、形ばかりで暖かみのないハーストウッド家を適切に表わしているといえよう。このように不満を抱いた成功者がキャリアの眼の前に現われたのであるが、彼女は、ドルーエに見られない彼の洗練された態度に惹かれ、ハーストウッドは、キャリアの素朴で、田園的で牧歌的な姿に感じるものがあつた。二人がはじめて出会うこの場面に「都会」と「田園」、「文明」と「自然」の対比をみてもよいが、重要なのは、これら二つが共存しえないという点である。「都会」にはハーストウッドの安定した地位や家庭が含まれるし、「田園」

にはキャリアに幸福を求めるといふことがあるだろう。現在の地位を保ちつつキャリアを求めるとは、ハーストウッドには不可能である。「都会」を守る一方で「田園」を志向することは叶わぬ夢なのだ。ここで彼は重大な選択を迫られることになる。結局彼は「都会」を捨てるのであるが、ここにわれわれはシオドア・ドライサー独自の成功観をみることができる。もし、ハーストウッドが「都会」を選んでいれば、彼の生活は変わらず、『スター・キャリア』は従来の「成功の夢」物語になるが、彼に「田園」を選ばせ、しかも、それをきっかけとして零落の道を進ませるといふ内容にしたことで、ありきたりの「成功の夢」物語の否定に変わっているのである。下降線を辿るハーストウッドにかわって、キャリアが逆に上昇線を歩み、ついに女優として成功するに到るのであるが、キャリアも共に落ちぶれてゆくのではなく、彼女を成功者に行っているところにこの作品の特異性がある。共に生活しながら、男性がはじめになり女性が成功するということは、当時の社会道徳では許されないことである。それをあえて行なった作者は、従来の「成功の夢」の空しさを痛感していたに違いない。その空しさを、作

者は成功者から失敗者に転落してゆくハーストウッドに見たのみならず、女優として成功したキャリーにも見出すようにしている。作品の結末部で、ハーストウッドがガス自殺をしたあと、成功者キャリー・ミーバーの姿を描き出す。しかし、そこには成功の満足感、幸福感といったものはみられない。かつて憧憬の的であった華美な生活がいざ実現してみると、それは意外にもの淋しいものであった。シカゴやニューヨークといった大都会、ドルーエやハーストウッドなどの成功者、ファッシュンやステージ、それらは単なる出来事にすぎなかった。そして、独り揺り椅子に坐って歌っているキャリーに、作者は詠嘆的によびかける。

Oh, Carrie, Carrie! Oh, blind stringings of the human heart! Onward, onward, it saith, and where beauty leads, there it follows. Whether it be the tinkle of a lone sheep bell o'er some quiet landscape, or the glimmer of beauty in sylvan places, or the show of soul in some passing eye, the heart knows and makes answer, following. It is when the feet weary

and hope seem vain that the heartaches and the longings arise. Know, then, that for you is neither surfeit nor content. In your rocking-chair, by your window dreaming, shall you long, alone. In your rocking-chair, by your window shall you dream such happiness as you may never feel.

ガスの栓をひねって、"what's the use?"と言いながらベッドに身体を伸ばしたハーストウッドの描写とは不釣り合なほどの詠嘆調であるが、われわれは、そのなかに一種の悲哀を感じとることができる。それは、成功をこととする「アメリカの夢」の空しさを嘆じたものといつてよからう。Oh, Carrie, Carrie! と呼びかける作者の脳裡に焼きついていたのは、表面的な「進歩の時代」にあつて、裏にある矛盾に気付かず、相変らず空しい夢を見る者のあさましい姿ではなかったか。自然主義作家シオード・ドレイサーの出発点は、進歩の思想であり、樂觀主義的概念である「アメリカの夢」を否定するところにあつたのである。

(1) ヨーロッパの自然主義のアメリカ自然主義作家への影

- 響じらうは Lars Ahnebrink の *The Beginnings of Naturalism in American Fiction* に鋭い分析がみられる。
- (2) 比較的最近の例をみても、デヴィッド・コンチの『アメリカの夢は終わった』、エドワード・オールビーの『アメリカの夢』、ウイリアム・フォークナーの『アメリカの夢に何が起ったか』などがある。
- (3) 南雲堂刊『講座アメリカの文化』第二巻の諸論文、とくに大橋、清水、渡辺各氏の論文がすぐれている。
- (4) (3) のシリーズにある『ユートリアニズムとアメリカ』の天下、阿部、志村各氏の論文が参考になる。
- (5) 機械の発達の観点からアメリカ文化を辿った書物として興味深いものに Roger Burlingame の *Machines that Built America* (1953) があつた。このなかで、銃の発達について述べた章 "Powered Tools"、自動車の発達を論じた章 "Machines for Fun and Freedom" には著者独自の文化観がみられる。
- (6) 註(3)の渡辺論文参照。
- (7) Norton Critical Edition 版の *Sister Carrie* のなかにこの作品出版に関する関係者の書簡が収められているが、

- それを読むと、出版側の態度がきわめて厳しいことがわかる。なお同書四三四頁以下四五四頁までを参照。
- (8) 同書三七四頁から三八四頁までを参照。
- (9) 同書九十九頁から一〇二頁までを参照。
- (10) A Norton Critical Edition *Sister Carrie* ed. by Donald Pizer 一頁を参照。
- (11) 同書十一頁から十二頁。
- (12) 同書十三頁。
- (13) 同書三頁。
- (14) 同書四十三頁から四十四頁。
- (15) 同書六十八頁。
- (16) 同書三十三頁。
- (17) 同書同頁。
- (18) 同書三十三頁。
- (19) 同書六十二頁から六十八頁。
- (20) 同書六十三頁。
- (21) 同書三六九頁。

(一橋大学助教授)